

## 市長メッセージ 「子どもたちの心の叫びに耳を傾けましょう」

本日はご遺族から当時の記憶を思い起こしながら貴重なお話を聞かせていただきました。平成25年5月の痛ましい出来事を重く受けとめ、私たちは取り組みを進めてきました。

しかし、令和元年度、本市の小学校で346件、中学校で112件のいじめが認知されております。減少傾向にはあるものの、未だにこれだけの多くの子どもたちが傷ついていることに、市長として心を痛めてきました。さらに、昨今の新型コロナウイルス感染症に関しては、感染者に対する差別や偏見等の問題にも真剣に取り組まなければなりません。

そこで私は、子どもたちを含め、市民の皆さんが安心して過ごせるまちづくりを更にすすめるために、次の点をお願いいたします。

まずは、なぜ子どもたちは声を上げられないのかということを実験に考えるべきです。この頃の子どもたちは自我や自尊心が大きくなり、自分がいじめで苦しんでいることすら認めたくないのではないのでしょうか。そんな子どもたちの声なき声に、私たち大人がいかによれば気がつくことができるのか、ぜひ皆さんに考え行動していただきたいと思ひます。

第二に、子どもたちが多くの時間を過ごす学校生活の中で、子どもたちの小さな変化やつぶやきを見落とさないことが必要です。

しかし、その対応のすべてを先生方に求めるには限界があります。そこで、そのサポートを地域の皆様方による、地域の教育力にも求めたいと思ひます。地域の方々にもこの協議会の主旨をご理解いただき、地域の宝を育てるためのご協力をお願いいたします。

第三に、保護者、さらには私たち大人が、加害・被害の枠を超えて、いじめの卑劣さ、非人道性について正しく認識し、いじめは社会全体に関する国民的な課題であるという認識を持つことが必要です。

そのために、廿日市市に住むすべての市民に、関係機関・団体が一体となったさらなる啓発活動を、社会が成熟し、いじめに対する理解が深まるまで強く推し進めます。

最後に、私たちは女子中学生の命日を「命の大切さについて考える日」としていじめの撲滅に取り組んできました。これは自死をした女子中学生が「命を粗末にした」という意味では決してありません。命の大切さを考えるべきはすべての市民です。この5月8日という日の大きな意味について、市民に伝えるための努力を私たちは積極的にしていかなければならないと思ひます。

市民の皆さん、私と一緒に、「いじめで子どもたちが苦しむことのない はつかいち、学校だけでなく大人が全員で子どもたちを見守り、支え合う はつかいち」のまちづくりに、ご理解とご協力をお願いいたします。

令和3年 2月26日

廿日市市長 松本 太郎